

史談

2009 (H21) 4・15

■ 稲ワラの話

私たちの生活の中からワラが消えて久しい。今では雪囲いの縄や神社の注連縄、畳などにしか稲ワラとは縁がなくなったが、このあたりでは昔からワラがなければ生活そのものが成り立たなかったといっている。

稲ワラは用途が広く、ハケゴ、タワラ、ムシロ、ミノ、カマス、ゾウリ、ワラジ、ジンベエ、フカグツ、エヂユ、ワラ布団などの生活用品の材料として使われた。ビニールやナイロンなどの石油製品が大量に出回る高度成長以前は、日常生活のあらゆる面で欠かせないものだったのである。

以前、「かあさんの歌」という歌について子どもが「夜なべとは、どんなナベか」と聞いたという話もあるが、二番には「おとうは土間で藁打ち仕事・・・」という歌詞が出てくる。稲ワラを貴重な材料として使っていた頃の「ワラ打ち」は、夜なべ仕事の代表的なもので、しかも作るものの仕上がりににもかかわる大切な作業だったという。それを機械化したのが「ワラ打ち機」で、この近辺でも現物はほとんどみられなくなった。

三年ほど前、その機械を西高玉の金田睦夫さんのところで見せてもらったが、今回訪ねたら一年ほど前に子ども会の廃品回収に出してしまったという。やはりあの時に譲ってもらおうか、もっと足繁く通うべきだったと後悔しても後の祭りである。金田さんは丈が長くて光沢のある品種で「小丈餅」という稲を毎年作り、手で刈り取りとった後は、雨に当てないようにして乾燥させるなど、独自の工夫をしてワラを保存しているという。

一方、横田尻の皇太神社ではこのたび五月の春祭りに合わせて、二十年ぶりで注連縄を新しくする予定だとか。今回、金田さんの指導のもとで注連縄作りをする総代を中心とした人たちの思いは、無病息災や家内安全などを願う区民の気持ちと同じものであるに違いない。(川)

■ 葉山をのぞむ

彼岸を前にしたこの時期、「三寒四温」を繰り返しながら季節は春へと移っていく。葉山を中心とした西山も雪解けが進み、その色合いを日々変えていく。すでに何回か黄砂も降った。

下の写真は東五十川の国道休憩所からの葉山付近。ふだんは何とも思わないが、この山に降り積もる雨や雪は、私たちの生活の源である。白鷹山や鷹戸屋などの東山も同様である。春の山菜から夏の農業生産、秋のキノコまで。さらには一年を通じて新鮮な空気は無償で与えてくれる。

こうしてみると、古人がこの周囲の山々に神の存在を認め、季節ごとに祭ってきたのも自然なことであるような気がする。



写真・井上日出男さん

■ 諏訪堰を歩く 1 守谷英一

1 諏訪堰の歴史

「諏訪堰」は、山形県長井市から、白鷹町広野まで、江戸時代初期に開削された農業用水である。史料によると、慶長10(1605)年に、白鷹町浅立の沼沢伊勢と畔藤の新野和泉によって企画され、約1年間の工事の末、完成されたものといわれている。

それまで、浅立と畔藤の間は最上川の氾濫原で、平地ではあったが用水となる川がなかった。土地の多くは原野であり、わずかに畑を作っているだけだった。

沼沢伊勢と新野和泉は、ここに最上川から用水を引けば立派に水田を開くことができると考え、

藩主に願い出た。もしも失敗すれば二人は処刑されることを条件に、願いは聞き入れられ、工事が始まったという。

様々な困難を乗り越え、堰は完成した。そして、開田したものにはその土地が与えられることから、次々に水田が開かれ、人が移り住んだという。

人々の移り住んだ集落が、現在の白鷹町広野であるという。記録によると、寛永14(1637)年には「広野村検地帳」が残されているので、広野開村は寛永年間であろうと推定されている。

「諏訪堰」という名称は、明治年間に水利組合として登録するとき用いられたもののようで、それ以前は「用水堰」とか「浅立広野用水堰」といわれていたようである。

現在でもこの堰は重要な農業用水であり、何度かの改修を加えながら、400年にわたり使われている。

2 諏訪堰頭首口

私の勤めている長井高校では、毎年1年生の秋に地域の巡検を行っている。主に、地域の特徴的な景観、史跡を訪ねたりすることが主で、慣例的に「社会科巡検」と呼んでいる。概ね生徒の通学している地域を巡ることになっているが、平成20年度の巡検にあたり、担当している教員から「諏訪堰はどこで見られますか。」と尋ねられた。私は毎日車で通勤しているので、「長井市森のあたりに行く道と道路の脇に見えるよ。」と話しておいた。

そのように答えたものの、その先白鷹町までどんな風になっているのか、きちんと確認したことはないことに気が付いた。いつか時間がとれたら、取水口から最後まで見てみようと考えたのが歩くきっかけとなった。

実際に行動したのは平成20年11月2日(日)である。10時21分荒砥駅発のフラワー長井線ディーゼルカーに乗って荒砥駅を出発した。10時40分アヤメ公園駅に到着、最上川を目指し歩き始める。

目的地は戸田山下の諏訪堰の取水口。専門的には「頭首口」というようである。



この取水口は何回か位置が変わっている。最初は「宮の舟戸(渡)八幡の上から揚水」と記録されているので、ほぼ現在地に近いところだったようであるが、その後、洪水によって岸が削られ、取水口のところは淵になってしまい仕切ることが困難になってしまった。

元和2(1616)年には「森村安松」というところに取水口が変更され、また、宝暦8(1758)年には「森村新屋敷」に変更されたことが記録に残っている。その工事は簡単ではなかったろう。平成20年8月26日に開催された「諏訪堰施設めぐり」のパンフレットを業務員の鈴木さんからいただいた。その表紙に、「約50年前の最上川をせき止めて引き水する作業風景」というキャプションの付いた写真が載っている。それが、人力で木材を組み合わせ、それを並べ、石を入れている風景である。わずか50年前でもその通りであるから、400年前の工事の困難さは想像がつく。400年前の人々は大水にも流されないことを祈りながら一つ一つ石を積み上げていったのではないかと思う。

(長井高校の『研究紀要』に発表された守谷英一氏の「諏訪堰を歩く」を、数回に分けて転載させて戴くことにしました。なお紙面の都合上、写真の位置などが違っている個所がありますのでご了承ください。)

■ この会報のための原稿を募っています。
長さは800字ほどで、内容は問いません。
随時、受け付けていますので、丸川まで。

■ 四月四日。早朝、白鳥が北に帰る姿あり。
このところ数日続く。川原でツバメとヒバリの姿見る。
近くの畑でキジの鳴くのを聞く。(川)